



「特別なこと」 道徳の授業でできる

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

「承知のことと思いますが、今回の学習指導要領改訂では、道徳を「特別の教科」と位置つけることになりました。「特別」とはこれまでなかった概念ですが、いったい何を意味するのでしょうか。それは、「これからは道徳も教科とするよ。でも、従来の教科とは一線を画するよ」ということで、具体的には、次の三点があげられるようです。

- ・文科省検定教科書を使用します。
- ・問題解決や体験的な学習なども取り入れ、「考え、議論する」道徳教育を目指します。
- ・学習の理解度や達成度を数字などで示すのではなく、文章で記します。

「道徳を教科に」という声は、以前からありました。しかしわたしは、それに疑問を抱いていました。なぜかというところ、「道徳的価値を教え込む傾向が強まるのか」「心のありようを数値的に示すこ

とにならないか」その二点を心配したからです。しかし他の教科と異なり、「特別の教科」とすることで、その心配は払拭されました。

そこでここでは、望ましい道徳の授業を実践する上で、今後わたしたちが努力すべき点について述べてみたいと思います。

○主体的に学ぶ姿勢を尊重し 多様性を認める授業へつなぐ

従来の道徳授業は、主に教師の発問と子どもの発言とで展開されてきました。画一化された道徳的価値のもとの一問一答式による授業は、「こうあらねばならない」という指導に傾き、教師のねらいが色濃くにじみ出るものになっていたと思います。そのため、授業では模範的なことを言っている、それが日常生活での実践と結びつかないざらざらがありました。

今回の改訂では「考え、議論する」道徳を目指しますが、大切なのは教師主導でなく、子どもが主体的に学ぶ姿勢を養うことです。

一つの例として、「友情・信頼」の授業で考えてみたいと思います。

友達が大事な物を忘れて登校したとき、やさしく貸してあげるのが友情でしょうか。いや、友達が忘れなくなることを願い、あえて厳しく貸さないのが友情

※道徳の評価は、あくまで道徳科の学習の中での学習活動にもとづいて行うとされています。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

でしょうか。

自由な話し合いでは、「仲がいいかどうかによる」とか、「たまたま忘れる子と、いつも忘れる子とでは違う」とか、「忘れた物にもよる」とか、多様な意見が出てくるでしょう。

そんな中で、どうしたらいいか考え込んだり判断に迷ったり、かつての自分自身の体験を思い浮かべたりする子も出てくるのではないのでしょうか。また、友達の様々な意見を聞きながら、葛藤する子もいると思います。

そして、「貸す、貸さない」のやり取りを乗り越え、「貸さないにしても、友達を思いやり、ぶつさらばうでなくやさしい言葉かけが必要だ」というような、より高い価値判断も生まれてくるでしょう。

その過程では、「そんなこと言っても無理ではないか」と本音で語ったり、「自分ではできなかった」と反省の弁を述べたりする子も出てくると思います。

こうした学習では、みんなの考えが交流し合って考えが温められたり、互いの意見がせめぎ合い、議論を呼んだりすることも、大切なねらいの一つになると思います。

ところで、このような授業における教師の役割は何でしょうか。いくら自由闊達な話し合いといっても、完全に子ども任せにしたら、話し合いが混んとしたり同じことが蒸し返されたりして、何を話

し合っているのかわかりにくくなってしまいます。そうならないよう、話し合いを方向づけてわかりやすくしたり、対立する考えを浮き彫りにしたりすることが求められます。また、学習を深める上で重要な役割を果たした子を賞賛し、その輪を広げることも欠かせません。

そして、「友情の示し方はいろいろある。でも、友達を思う心は一つだ。自分ほどの考えに近いだろう」といった見方ができるようにします。つまり多様性を大切にすることです。

○子どもの成長をとらえ 心を育む評価を目指したい

次に、評価を文章で記す点にふれたいと思います。

およそ、授業をすれば評価はつきものでしょう。子どもが自信をもったり、自己認識を豊かにしたりする上で重要だからです。

私は担任の時、「子どもの成長に役立つ」と判断したら、通知表に道徳の内容も記載していました。それを例示してみよう。

・休み時間お友達と楽しそうに話していた時、「うわあ。Aちゃんがしたことは、この前、道徳で学習したくまさんと同じだね。すごいじゃん」というBさんの声が聞こえてきました。うれしかったです。

たです。

・みんなの前で頬を紅潮させ、勇気をもって発言しました。自分のよくないことでもしっかり話す態度に、心打たれました。それ以来、生活ぶりは一変しています。

・道徳の時間に「今戦争はないけれど、交通事故などで傷つく人はいるから、そういう人を助け、心をいやしてあげられる人になりたい」と発言しました。もともとやさしいCさんですが、その思いをさらに強めたようです。

このように、私はどの子どもに対しても、その子なりの成長をとらえ、少しでも伸びようとする心を育むような文章表記を心がけました。「教師に言われたから」ではなく、「自ら主体的に」道徳的価値を追求する子どもを育てたいものです。

最後に、道徳は、子どもたちの人間関係を豊かにします。また、豊かな人間関係がさらに活発な議論を呼ぶことにつながります。

新指導要領の下、そうした授業を期待します。

